

## 新製品発売のご案内

[ESOTERIC名盤復刻シリーズ]

サン=サーンス:交響曲第3番《オルガン付》&ビゼー:交響曲ハ長調

シャルル・デュトワ(指揮)  
モントリオール交響楽団

モーツァルト:ピアノ・ソナタ集

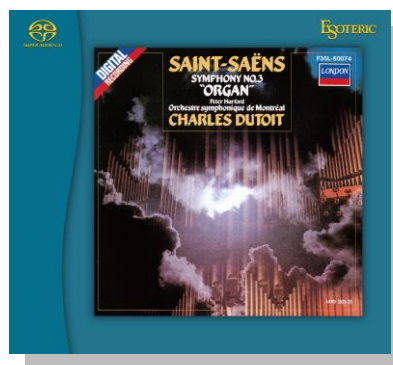
マリア・ジョアン・ピリス(ピアノ)

エソテリック株独占販売 2018年9月14日 発売

### サン=サーンス:交響曲第3番《オルガン付》&ビゼー:交響曲ハ長調

シャルル・デュトワ(指揮)  
モントリオール交響楽団

- 品番:ESSD-90188
- 仕様:Super Audio CD ハイブリッド
- 定価:3,611 円+税
- POS:4907034222544
- レーベル:DECCA
- 音源提供:ユニバーサルミュージック合同会社
- ジャンル:交響曲



### モーツァルト:ピアノ・ソナタ集

マリア・ジョアン・ピリス(ピアノ)

- 品番:ESSG-90189
- 仕様:Super Audio CD ハイブリッド
- 定価:3,611 円+税
- POS:4907034222551
- レーベル:DEUTSCHE GRAMMOPHON
- 音源提供:ユニバーサルミュージック合同会社
- ジャンル:器楽曲



- DSD MASTERING/Super Audio CD 層:2 チャンネル・ステレオ[マルチなし]
- 美麗豪華・紙製デジバック・パッケージ使用

“Super Audio CD”と“DSD”は登録商標です。

エソテリック株式会社(代表取締役社長 大島 洋)は、「名盤復刻シリーズ」Super Audio CDハイブリッド盤2作品を発売開始いたします。

今回の作品は、定評の丁寧なマスタリング作業によってSuper Audio CD化され、音質の向上はもとより、作品が本来備えた音楽的魅力を改めて浮き彫りにし、新たなる感動を約束するものに仕上がっています。この2作品はエソテリック株式会社の独占販売で、主にオーディオ販売店で販売されます。

## [アルバムの特徴]



サン=サーンス:交響曲第3番《オルガン付》

&ビゼー:交響曲ハ長調

シャルル・デュトワ(指揮)

モントリオール交響楽団

1980年代、「モントリオールの奇跡」と称された、デュトワ最高の名盤・名録音。

### ■ESOTERICならではのこだわりの Super Audio CD ハイブリッド・ソフト

オリジナル・マスター・サウンドへの飽くことなきこだわりと、Super Audio CD ハイブリッド化による圧倒的な音質向上で確固たる評価をいただいている ESOTERIC 名盤復刻シリーズ。発売以来 LP 時代を通じて決定的名盤と評価され、CD 時代になった現代にいたるまで、カタログから消えたことのない名盤を高音質マスターから DSD マスタリングし、世界初の Super Audio CD ハイブリッド化を数多く実現してきました。今回は CD 時代に入ってからの名録音2タイトルを Super Audio CD ハイブリッドで発売いたします。

### ■デジタル録音と共に歩んだデュトワ+モントリオールの名盤

たとえばエルネスト・アンセルメとスイス・ロマンド管弦楽団の録音の成功が、ステレオ録音というテクノロジーの発達と切り離せないのと同じく、シャルル・デュトワとモントリオール交響楽団の一連のデッカ録音ほど、デジタル録音という画期的な技術の完成と発展と密接に結びついて爆発的に評価を高めた演奏芸術はほかになかったといえるでしょう。「北米のバリ」と称されるカナダ第2の都市モントリオールを拠点に1935年に遡る歴史を持ち、1960年代にはズービン・メータを音楽監督に迎えて飛躍したものの、その後は国際的な舞台からは長らく遠ざかっていたモントリオール交響楽団が、1936年スイス・ローザンヌ生まれのシャルル・デュトワを音楽監督に迎えたのが1977年のこと。抜群の耳を持つ職人気質のデュトワは、士気の衰えたオーケストラに根気よく地味な訓練を徹底し、ごく短期間で高い音楽性を備えた機能的なアンサンブルへと育て上げました。このコンビが1980年のラヴェル「ダフニスとクロエ」から開始され(より正確にはジョン・キョンファとのコンチェルト録音が最初)、2004年まで約四半世紀にわたって続いたデッカへのフランス音楽を中心とする一連の録音は、折しも世界的に普及し始めたデジタル録音によるコンパクト・ディスクでリリースされ、彼らの名を世界的なものにしたのでした。

### ■デュトワ+モントリオール初期の名盤、《オルガン付》

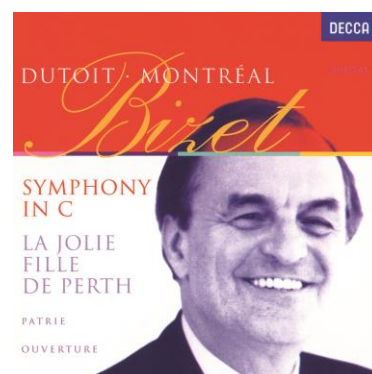


1982年6月に4日間のセッションで収録されたサン=サーンスの交響曲第3番《オルガン付》は、コンチェルト以外のデュトワ+モントリオールのコンビによる録音としては、ラヴェル2枚とファリャに次ぐ4枚目のアルバムとなったものです。長らくこのコンビのプロデュースを手掛けたデッカのレイ・ミンシャルによると、デュトワこそは「実力があり、カリスマ性を備え、すべてのコンセプトを本当の成功へと導く能力を持つ音楽家」であり、デッカは、このコンビに、LP時代にレーベルのフランス音楽の重要なカタログとなったアンセルメとスイス・ロマンド管のレパートリーを、デジタル時代に継承・再現させることにしたのです。まずは正確なリズム、音程、ハーモニー、美しく統御された音色の多彩さ、音楽的なオーケス

ト・バランスを基礎に、弦楽器の刻み一つまで疎かにされない、職人的な緻密なエクゼキューションを積み重ね、作品のあるがままの姿を再現する姿勢が基本にありつつ、デュトワの色彩感に対する優れたセンスは、決して無味乾燥にならないエンターテインメント性を兼ね備えていました。マスとしてのオーケストラ・サウンドの見事さのみならず、随所に聴かれるフルートのティモシー・ハッチンスらに代表される木管・金管奏者の冴えたソロが聴き手の耳をそばだたせ、たとえテクスチャが複雑になってもそれぞれのパートがごくごく明晰に演奏され、決して音が濁らないというある意味オーケストラ演奏の一つの理想に辿り着いていたのです。この交響曲でも、第2楽章の後半でオルガンが加わる有名なクライマックスだけではなく、第1楽章序奏の弦楽パートのシルキーな響き、第2楽章前半の中間部でピアノ2台が加わる部分の細かな音符が全て生き生きと躍動するヴィルトゥオジティなど、聴きどころは無数にあります。何よりもこのコンビの音楽性の高さを証明しているのは、第1楽章後半で静かなオルガン・ソロに導かれてヴァイオリンがピアノニッシモで加わるときのデリケートの極みともいえるような絶妙なバランスでしょう。

### ■これまで気づけなかった美を発見するビゼー

1995年に3日間のセッションで録音されたビゼーの交響曲は、CD初期の「カルメン&アルルの女」に次ぐこのコンビの2枚目のビゼー・アルバムとなったもの。彼らのデッカ録音としては比較的最後期にあたるもので、音楽に対する姿勢はサン=サーンスと全く同じで、細部を疎かにすることなく、第2楽章の見事なオーボエのソロに添えられたピッツィカート、往々にして崩れがちな第4楽章の第1主題の生き生きとした弦楽の刻みなど、演奏のあちこちにこれまで気づけなかったような美を発見することのできる名演です。



### ■最高の状態での Super Audio CD ハイブリッド化が実現

デュトワとモントリオール交響楽団のデッカ録音は全て、モントリオールから20マイル(約50キロ)西部にある聖ユスターシュ教会で行われました。18世紀後半に典型的なフランス=カナダ様式で建立されたこの教会は、オーケストラ録音用としてはやや狭かったものの、天井が高く響きの抜けがよく、このコンビの録音場所としては理想的でした。アナログ時代に世界最高峰の音響とされたロンドンのキングスウェイ・ホールと比肩することのできる録音会場と評価されたこともあるほどで、特にサン=サーンスでは教会という言葉から想像されがちな残響過多なことは全くなく、細部が明晰に保たれつつ、適度な美しい響きがついており、デッカのヴェテラン・エンジニア、ジェームズ・ロックの技の冴えを聴きとることが出来ます。発売当初から優秀なデジタル録音として高く評価されたため、これまでリマスターされたのは2006年の「デッカ・オリジナルス」での発売のみで、今回はそれ以来の、そして初めてのDSDリマスタリングとなります。今回の Super Audio CD ハイブリッド化に当たっては、これまで同様、使用するマスターテープの選定から、最終的なDSDマスタリングの行程に至るまで、妥協を排した作業が行われています。特にDSDマスタリングにあたっては、DAコンバーターとルビジウムクロックジェネレーターに、入念に調整されたESOTERICの最高級機材を投入、またMEXCELケーブルを惜しげもなく使用することで、オリジナル・マスターの持つ情報を余すところなくディスク化することができました。

### ■「さらに進化したフランス風交響曲の華麗な姿」

#### ◎サン=サーンス

「最近では最もフランス的な特質を備えたオーケストラとして、急速に評価の高まったデュトワとモントリオール交響楽団だが、このサン=サーンスはその特徴を端的に示した1枚である。その明るいふくやかな響きとオルガンの音色が溶け合って醸し出す、第1楽章後半の憧れに満ちたコラル風の高貴なリリズム、第2楽章前半の速いテンポで軽妙な味わいをたたえたスケルツォ、そして後半の輝かしい華麗なクライマックスなど、大仰にならずに音楽的なバランスをよく保って流麗に仕上げている。」

(『レコード芸術別冊・クラシック・レコード・ブック VOL.1 交響曲編』、1985年)

「デュトワは、とくに意図したわけではなくて自然にそうなったのだろうが、響きと音楽をバランスよく共存させているのがよい。さらに音楽に関していえば、サン=サーンスの古典的な一面とロマン的な一面をあるがままに無理なく両立させ、柔軟でデリケートな表現を生み出している。」

(『ONTOMO MOOK クラシック名盤大全 交響曲編』、1997年)

「デュトワのフランスものはラヴェルの一連の名盤から始まり、その定評は非常に高いが、このサン＝サーンスの第3番もその線上で成功している。先輩格のミュンシュやマルティノンの情熱性やフランス・エスプリ的感性を受け継ぎながらも、現代的な洗練性とモントリオール響の滑らかでバランスのよい響きを十分に生かして、さらに進化したフランス風交響曲の華麗な姿を作り出している。重厚な響きではあるが鈍重にならず、常に流麗な方向へと導き、また様々な色彩の変化の綾を細やかに作り出しているのも特徴である。その結果、サン＝サーンスのオーケストレーションがさらに鮮やかさを増すことになる。いずれにせよ、スマートな快演である。」  
(『クラシック不滅の名盤 1000』、2007年)

◎ビゼー

「デュトワのすっきりとした明快な指揮は曲とマッチし、フランス的な軽さが活きている。」  
(『ONTOMO MOOK クラシック名盤大全 交響曲編』、1997年)

[収録曲]

カミーユ・サン＝サーンス

交響曲 第3番 ハ短調 作品78《オルガン付》

[1] 第1楽章: アダージョ～アレグロ・モデラート

[2] ポーコ・アダージョ

[3] 第2楽章: アレグロ・モデラート～プレスト～アレグロ・モデラート

[4] マエストーゾ～ピウ・アレグロ～モルト・アレグロ

ピーター・ハーフォード(オルガン)

ジョルジュ・ビゼー

交響曲 ハ長調

[5] 第1楽章: アレグロ・ヴィーヴォ

[6] 第2楽章: アダージョ

[7] 第3楽章: アレグロ・ヴィヴァーチェ～トリオ

[8] 第4楽章: アレグロ・ヴィヴァーチェ

テッド・バスキン(オーボエ)

[録音]1982年6月17、18、24&25日(サン＝サーンス)、1995年5月17、24日&10月11日(ビゼー)、モントリオール、聖ユスターシュ教会

[初出] サン＝サーンス 410 201-2(1983年) ビゼー 452 102-2 (1996年)

[日本盤初出] サン＝サーンス LP:L28C1466 (1983年6月25日) CD:410 201-2(1984年1月10日)

ビゼー POCL1699(1996年10月25日)

[オリジナル・レコーディング]

[プロデューサー] レイ・ミンシャル(サン＝サーンス)、クリス・ハイゼル(ビゼー)

[バランス・エンジニア] ジェイムズ・ロック(サン＝サーンス)、ジョン・ダンカリー(ビゼー)

[Super Audio CD プロデューサー] 大間知基彰(エソテリック株式会社)

[Super Audio CD リマスタリング・エンジニア] 杉本一家(JVC マスタリングセンター(代官山スタジオ))

[Super Audio CD オーサリング] 藤田厚夫(有限会社エフ)

[解説] 諸石幸生

[企画・販売] エソテリック株式会社

[企画・協力] 東京電化株式会社



## [アルバムの特徴]



### モーツァルト:ピアノ・ソナタ集 マリア・ジョアン・ピリス(ピアノ)

希代のモーツァルティアン、ピリスの総決算となった究極のソナタ録音 4 曲。

#### ■ ESOTERIC ならではのこだわりの Super Audio CD ハイブリッド・ソフト

オリジナル・マスター・サウンドへの飽くことなきこだわりと、Super Audio CD ハイブリッド化による圧倒的な音質向上で話題沸騰中のエソテリックによる名盤復刻シリーズ。発売以来決定的名盤と評価され、現代にいたるまで、カタログから消えたことのない名盤をオリジナル・マスターから DSD マスタリングし、世界初の Super Audio CD ハイブリッド化を実現してきました。今回は CD 時代に入ってからの名録音 2 タイトルを Super Audio CD ハイブリッドで発売いたします。

#### ■ 希代のモーツァルティアン、ピリス

ポルトガル出身の女流ピアニスト、マリオ・ジョアン・ピリス(1944 年リスボン生まれ)が世界的な注目を浴びたのは 1970 年のベートーヴェン国際コンクール優勝がきっかけでした。そしてレコーディング・アーティストとしてのピリスの名を大きくアピールしたのは 1974 年初頭に約 1 か月半をかけて東京・イノホールで録音されたモーツァルトのピアノ・ソナタ全集という大作。日本コロムビアから発売されたこの 8 枚組の全集は PCM デジタル録音による世界初のモーツァルト・ピアノ・ソナタ全集であったのみならず、ヨーロッパではフランスのエラート・レーベルで発売され ADF ディスク大賞、エディソン賞など重要なレコード賞を受賞し、同時期にエラートに録音した LP4 枚分のピアノ協奏曲集とともに、まだ 30 歳になっただけの「新しい世代のモーツァルト弾き」としてのピリスの姿を鮮烈に印象付けたのでした。

#### ■ 2 度目のモーツァルト全集からのベスト選曲



それ以来モーツァルトのピアノ作品は、ピリスのトレードマークとなりました。小柄で手も小さいピリスにとっては、モーツァルトの作品はある意味理想的で、その音楽性の全てを余すところなく投入できる対象となったのでした。ピリスは 1970 年代後半から 80 年代前半にかけて病を得て演奏・録音活動の中断を余儀なくされましたが、演奏活動再開後初めて手掛けた録音は、やはりモーツァルト(1984 年 2 月、ピアノ・ソナタ第 6 番・第 14 番他、エラート)でした。そして 1989 年にエラートからドイツ・グラモフォンに移籍したピリスが録音プロジェクトの最初に選んだのもモーツァルトのソナタであり、今回は 1991 年の没後 200 年となるモーツァルト・イヤーを念頭に入れてのドイツ・グラモフォンにとってのアニヴァーサリー企画の一つと位置付けられ、89 年から 90 年にかけてピリスにとって 2 度目の全集が録音されました。当アルバム

はこの 2 度目の全集で最初に発売された 2 枚のアルバムから 4 曲を新しくコンパイルしたものです。

#### ■ 20 世紀後半のモダン・ピアノによるモーツァルト解釈の到達点

作曲家が指示したリピート記号を遵守し、粒ぞろいの美音と、過度にならない自然なニュアンス付け、そして極力装飾を控えるというピリスのモーツァルト解釈は、まさに 20 世紀後半のモダン・ピアノによるモーツァルト演奏様式を極めたものと言えるでしょう。過剰な感情のふり幅を持ち込まず、むしろストイックなまでに緻密なコントロールを聴かせつつも、決して堅苦しくない雰囲気を持つ演奏は、音楽や作曲家に対して常に真摯な姿勢で臨んできたピリスの人柄を反映しているかのようです。折しも 2018

年末をもって公開の演奏活動からは身を引くことを発表したピリスですが、そうした時期に彼女が残したもっとも重要な録音の一つが新たなリマスタリングによって復活するのも、時宜にかなったことといえるのではないのでしょうか。

### ■最高の状態での Super Audio CD ハイブリッド化が実現

録音はドイツ・グラモフォンが1970年代からソロや室内楽の録音に多用している、ハンブルクから電車で20分ほどの郊外ハールブルクにあるフリードリヒ=エーバルト=ハレで行われました。1929年に建造され、パイプ・オルガンも備えた1885席のホールは、録音においても透明感のある暖かいアコースティックが得られることが知られています。1980年代以降のドイツ・グラモフォンのメイン・エンジニアの一人、ヘルムート・バークによる音作りは、大きなホールでの録音にもかかわらず、ピリスをごく親密な空間で聴いているかのようなイメージを与えてくれるもので、作品と演奏の本質に相応しい見事なエンジニアリングです。もともとが優秀なデジタル録音であり発売以来特にリマスターが施されたことはなかったため、今回は初めてのDSDリマスタリングとなります。今回のSuper Audio CD ハイブリッド化に当たっては、これまで同様、使用するマスターテープの選定から、最終的なDSDマスタリングの行程に至るまで、妥協を排した作業が行われています。特にDSDマスタリングにあたっては、DAコンバーターとルビジウムクロックジェネレーターに、入念に調整されたESOTERICの最高級機材を投入、またMEXCELケーブルを惜しげもなく使用することで、オリジナル・マスターの持つ情報を余すところなくディスク化することができました。



### ■「モーツァルトを聴く喜び、ここに極まる」

「音色の整った美しさや、正確な進行の変化など、自然に成功させているだけでなく、ただ感覚にまかせて弾いているのではない、何かモーツァルトのピアノ・ソナタ全体を展望する姿勢が、はっきりと感じとれる。ピリスはただの「モーツァルトが得意な女流ピアニスト」じゃない。こまかなニュアンスで優しさを響かせる一方で、どこかに必要な冷徹な計算をも、ちゃんと隠し持っているのが強力だ。」

(『ONTOMO MOOK クラシック名盤大全 器楽曲編』、1998年)

「(ピリスが)90年前後になって、彼女が改めて着手し完成したモーツァルト・ソナタ全集の魅力は、演奏芸術家としての心、技両面にわたる深まりを物語って、まさしく格別なものがある。初出当時、中の1枚を聴いた折に私は「モーツァルトを聴く喜び、ここに極まる」とまで書き記したが、思いは今も変わらない。人々がモーツァルトに抱くイメージを裏切らない、むしろ端正な弾きぶりでありながら、そこには、いかに精巧な造花でも決して表しえない、生花ならではの瑞々しさが息づいているのだ。」

(『クラシック不滅の名盤1000』、2007年)

#### [収録曲]

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト  
ピアノ・ソナタ 第15番 ハ長調 K.545

- [1] 第1楽章: アレグロ
- [2] 第2楽章: アンダンテ
- [3] 第3楽章: ロンド(アレグレット)

ピアノ・ソナタ 第8番 イ短調 K.310(300d)

- [4] 第1楽章: アレグロ・マエストーソ
- [5] 第2楽章: アンダンテ・カンタービレ・コン・エスプレシオーネ
- [6] 第3楽章: プレスト

ピアノ・ソナタ 第11番 イ長調 K.331(300i)《トルコ行進曲付》

- [7] 第1楽章: 主題(アンダンテ・グラツィオーソ)と変奏
- [8] 第2楽章: メヌエット〜トリオ

[9] 第3楽章: アラ・トゥルカ(アレグレット)

ピアノ・ソナタ 第14番 ハ短調 K.457

[10] 第1楽章: モルト・アレグロ

[11] 第2楽章: アダージョ

[12] 第3楽章: アレグロ・アッサイ

[録音]1989年2月(K. 545 & 310)、1990年5月(K.331 & 457)、ハンブルク、フリードリヒ=エーバルト=ハレ

[初出]

第15番・第8番 427 768-2 (1989年) 第11番・第14番 429 739-2 (1990年)

[日本盤初出]

第15番・第8番 F00G20474 (1990年1月25日) 第11番・第14番 POCG1053 (1990年11月25日)

[オリジナル・レコーディング]

[プロデューサー] クリストファー・オールダー

[バランス・エンジニア] ヘルムート・バーク

[エディティング] ティロ・グラハン(K. 545 & 310)、クラウド・ペーレンス(K.331 & 457)

[Super Audio CD プロデューサー] 大間知基彰(エソテリック株式会社)

[Super Audio CD リマスタリング・エンジニア] 杉本一家(JVC マスタリングセンター(代官山スタジオ))

[Super Audio CD オーサリング] 藤田厚夫(有限会社エフ)

[解説] 諸石幸生 柴田龍一

[企画・販売] エソテリック株式会社

[企画・協力] 東京電化株式会社

## エソテリック独占販売

エソテリック特約店にてお求めください。エソテリック特約店につきましては弊社ホームページの「製品展示・販売店のご案内」または「AVお客様相談室」へお問い合わせください。

ホームページ 製品展示・販売店のご案内 <http://www.esoteric.jp/support/shop/>

### AVお客様相談室

0570-000-701(ナビダイヤル) PHS・IP電話からは Tel 042(356)9235/Fax 042(356)9242  
受付時間:9:30~12:00/13:00~17:00 (土・日・祝日・弊社休業日を除く)